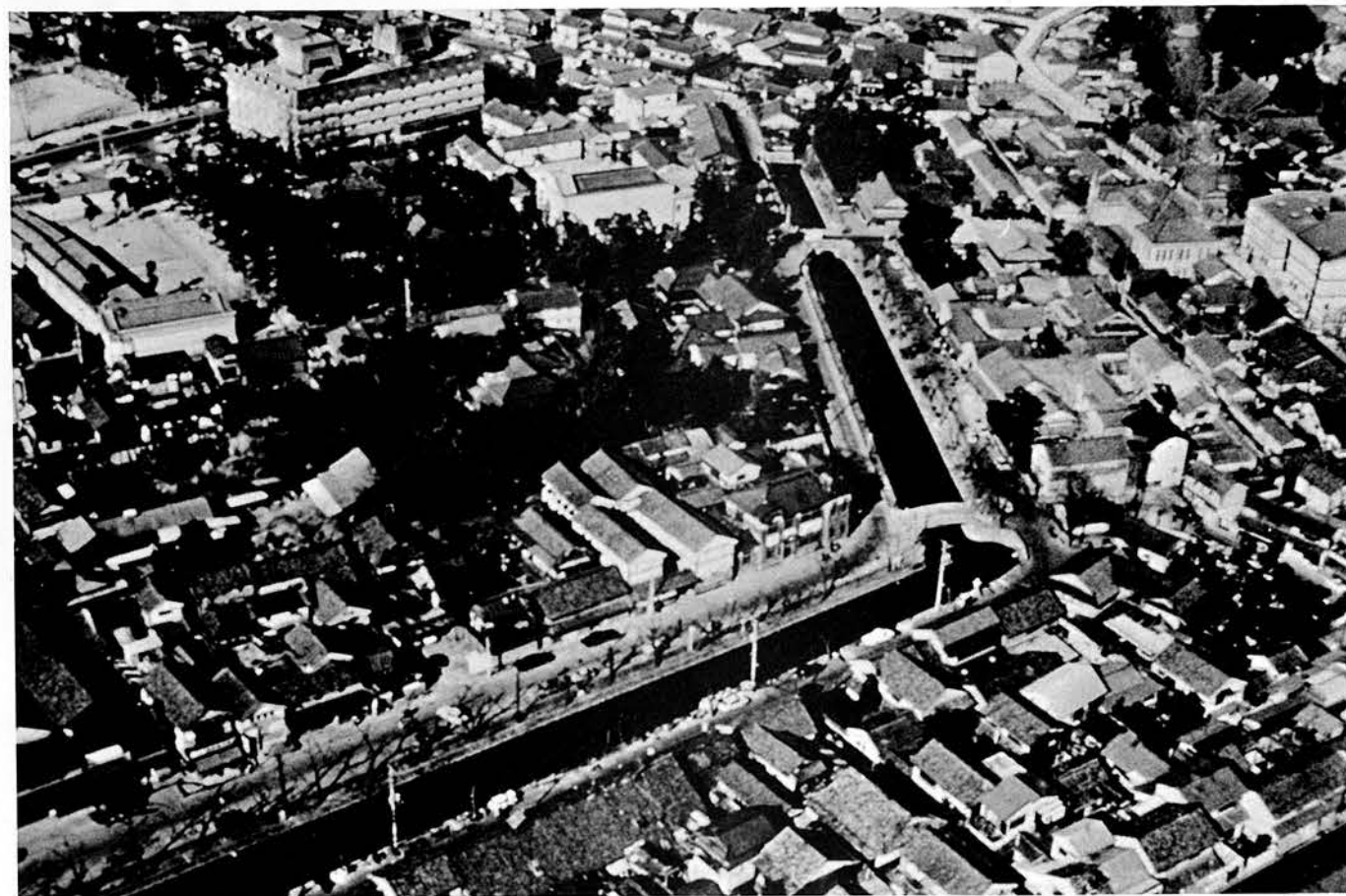


倉敷の町並の伝統的環境保全と、その現代的再生のために永年尽力し、建築リハビリテーション方式の先駆的開発によるサイン建築群で、異色の地方文化都市、倉敷の今日を築いた多大の功績をたたえて。

〔Special Prize〕 S.Urabe & Associate Architects

President: Shintaro Urabe

Praising many years' efforts for designing "sign architectures" and conservation of traditional fine spectacle in Kurashiki.



77 元倉敷保存村区

78 倉敷中央病院, 市民病院, アイビスクエア, 保存地区, 市庁舎, 中央は鶴形山。

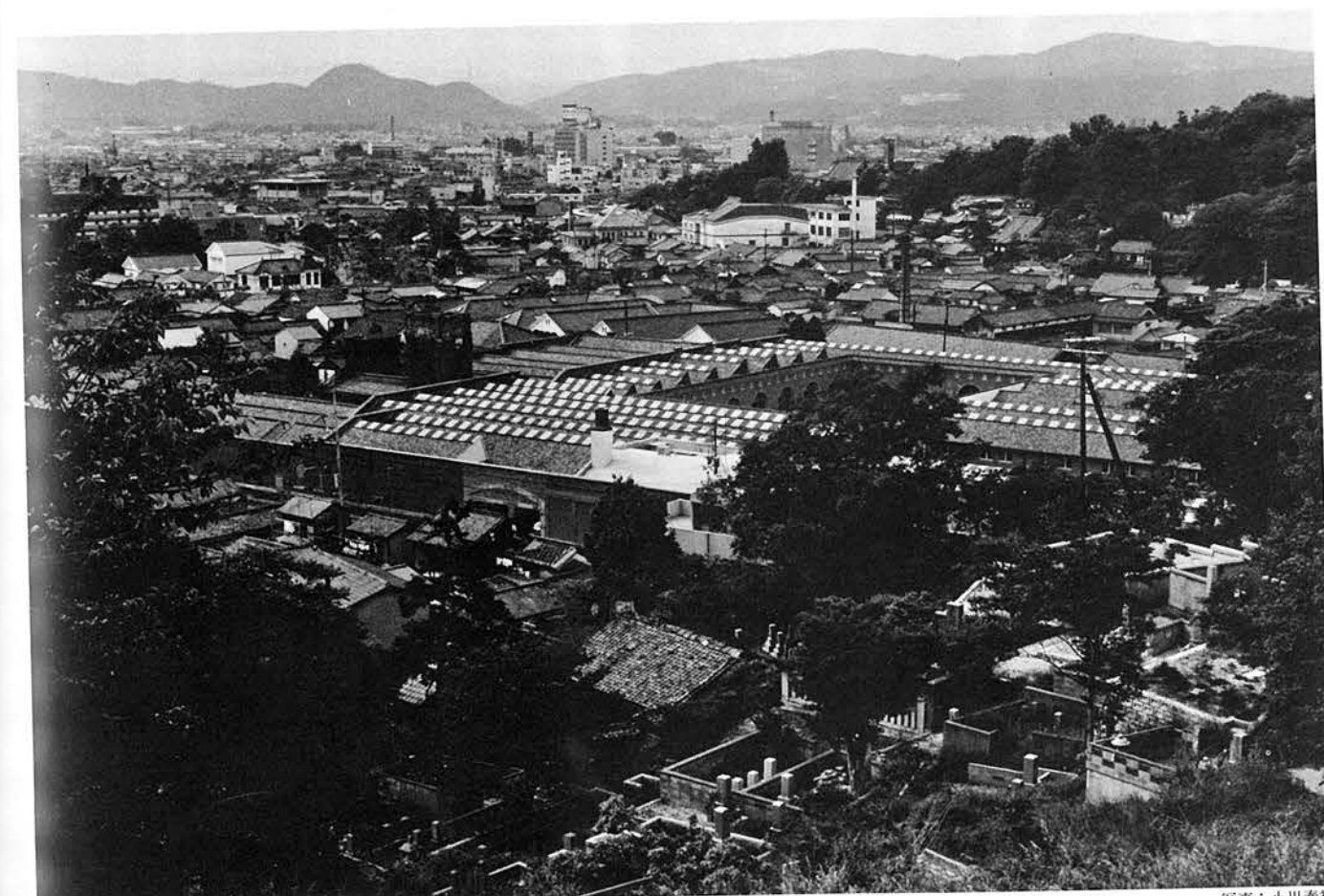


浦辺建築事務所の 倉敷における業績



79 浦辺鎮太郎氏

昭和24年	倉敷民芸館	(設計協力)	民家を移設改修
25	倉敷考古館	(〃)	民家を改修
31	旅館〈くらしき〉	(〃)	民家を改修
34	喫茶店〈エル・グレコ〉	(〃)	旧事務所を改修
36	大原美術館分館		
38	倉敷国際ホテル	〈建築学会賞〉	〈建築年鑑賞〉
40	倉敷ユースホテル		
43	クラレ中央研究所		
44	倉紡記念館	(設計)	倉庫を改修
	倉敷文化センター		
45	倉敷駅前再開発事業	調査に着手(以後現在に至るまで継続)	
46	倉敷館	旧町役場を改修	観光客の休憩所に
	倉敷商工会館		
	倉敷市水道局庁舎		
	珈琲館	民家の改修	
47	倉敷市民会館	〈毎日芸術賞〉	倉敷市民会館の設計及び倉敷市の伝統美保全の成果に対して
	〈倉敷市文化章〉	建築設計を通しての生活文化向上の貢献により昭和47年度倉敷市文化章を浦辺鎮太郎に	
49	倉敷アイビスクエア	旧工場を改修	〈建築学会賞〉 〈日本インテリアデザイナー協会賞〉 〈日本店舗設計家協会特別賞〉
50	倉敷中央病院 第一期		



80 アイビスクエアと保存地区

建築家

●辻野純徳

「ローテンブルグも美しいが、倉敷も負けないよ」昭和13年末、2年余の滞欧を終え帰倉した大原総一郎（1909～1968）は浦辺鎮太郎にこう語った。常々「倉敷を地方のモデル都市にしよう」との構想をめぐらす大原と、倉敷のデュードックでありたいとの願いも当時の小都市倉敷にはそのポストがなく倉敷レイヨン入りした浦辺、岡山一中・六高と平行して進み、大原は東大で経済を、浦辺は京大で建築を学び、再び郷土倉敷につながった。

倉敷の歴史的景観保存については「天領倉敷」（浦辺鎮太郎 建築雑誌'73-12）に、明治期の欧米資本主義の洗礼以降については、「倉敷—その歴史と現在」（辻野純徳—都市住宅'74-7）に詳しいが、明治期以降はむしろ中央集権的な文化に遅れをとらぬ地方都市として近代化の為の積極的開発が行われた。倉敷紡績所（現アイビススクエア）倉敷中央郵便局（現三桑会館）、町役場（現倉敷館）、中国銀行、今橋、有隣荘、大原美術館、奨農土地（現エルグレ

コ）など、日曜講演会に代表される近代化指向が、大原孫三郎（1880～1943）を中心にしかし地元住民と共にすすめられた。戦後、財閥解体と農地改革（1948）に遭遇した大原総一郎は、残された資金から音楽図書館設立の為に1,200万円を市に寄託、さらに自家の米倉を寄贈改装して倉敷民芸館（'49）の基をなし、モデル都市倉敷の第一歩とした。音楽図書館やクラブ又はホテルの構想など浦辺に描かせては熟考する大原、浦辺の云う大原構想は保有地区及びその周辺にも及んだ。結果は倉を改装しての倉敷考古館（'50）商家を内部改装しての旅館くらしき（'56）、事務所建築を内部改装してのエル・グレコ（'59）と新しい文化性を求めながらも歴史的景観を一つとして崩すことはなかったことは今ふりかえると驚くべき見識と云えよう。高度成長経済期を前に建てられた市庁舎の計画にあたって、丹下健三につけた大原の唯一の注文は「伝統的な商家群に顔を向ける必要はない。それらがこちらを向く庁舎を」と、しかし翌'61年の浦辺

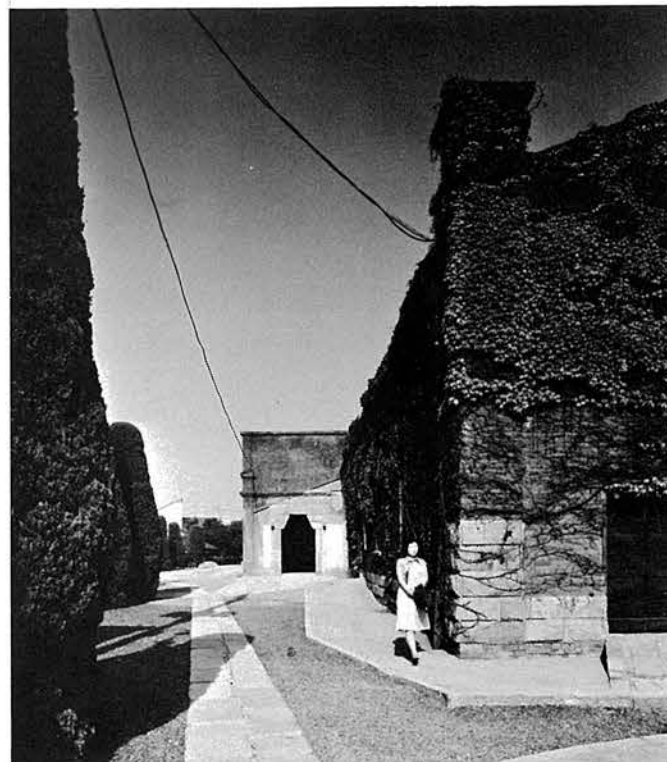
による大原美術館新館は元倉敷を水島などの新開発地区から守る城壁的存在として自他共に許すものであり、さらに'63年の倉敷国際ホテルはモデル都市の条件としてだけでなく市庁舎と旧倉敷のへだたりに橋渡しする建物ともなり、これも城壁的存在とされた。

鶴形山を中心とするわずか1KM角に足らぬ地域、市庁舎、市民会館・倉敷中央病院、駅前再開発を角櫓と做し元倉敷のランドマークとし、その中を充実させたいとの大原構想を、大原なきあとも浦辺はそのキャンパスにプランを描き、21世紀にも描きつけられるよう後事を託している。その一辺の半ば保存地区を中心にひしめく観光客を堀割沿の500Mからひきのばそうと、一つの角櫓市民会館が文化のランドマークとして保存地区の外側に完成した。緩衝的位置のアイビススクエアは保存地区へは外観をそのままに、市民会館側には新しいイメージをもってつくられた。市民会館も薨の波を崩す巨大な箱をさけ、内に大きく外

に小さくなるよう注意深くつくられ、その先端の赤は鶴形山に飛び立つ鶴の如く、外壁は保存地区の黒と白、足元は地元の土の凝結した花崗石（万成）で構成されている。駅前から市庁舎に通じる元町通りは拡幅され駅前商業地区と水島工業地区をつなぐ幹線となるが、その市庁舎前までに「一丁シャンゼリゼ計画」（'69年）と呼ぶショッピングモール案が計画道路沿いとその後背部の既存市街地を有機的につなぐものとして提案されたが、現状は孤立乱立型の例にもれない。しかし全国から押しよせる商業や観光のエネルギーと、容量不足の旧倉敷、その緩衝となる駅前再開発の実像が、21世紀にかゝっても「一丁シャンゼリゼ計画」を形成するにちがいないと信じ、願っている。もう一つの角櫓の倉敷中央病院は、大原孫三郎の人道主義の証であり、企業がそれ自体の殻にとじこもり利益追求のみに終るのでなく、地元住民又は市民意識の支えによって展開された記念碑でもあった。「赤い屋根の再現」（新建築'75・11）には

永い地下工事とインフレを心配し、鉄骨に安心し、朱い屋根に喜びの声をかけてくれる市民の支えがあった。大正12年の創立時は倉敷中央病院として、従業員には収入に応じた支払の出来る保険制度に近いものが、あり、又一般市民に開放を前提とした岡山医大に劣らぬ東洋一の病院として朱い屋根と薨がそのシンボルとなっていた。半世紀を経ての大改装に名物の温室も薨も朱い屋根も、創立時の建物四棟も復元し保存的に利用してそのイメージを継続することは当然のことであろう。また都市的なサインとしてのランドマークのみならずも、直接行動にむすびつくサインボードも大切に、特に大規模化（1,200床、50,000㎡）複雑化した当病院では、同規模病院の実態調査に基きヒエラルキーを設けた廊下計画、（通り等）とランドマーク（温室等）で、「患者本位の病院」の目的が果せるよう計画されている。保存地区の中に倉敷美術館と称するものが不可解な経過をもって恥姿をさらしている。

一部には書割的な土産物店も並んでいる。しかし大原総一郎亡きあとに、音楽図書館併設の市文化センターが元小野家の3階倉をおもわせる様に、残されていた3つの角櫓も実像がみえはじめ、そしてアイビススクエアが、その内庭1,400㎡が倉紡が倉敷だから出来る仕事として開放されるなどキャンパスに彩色が加えられつつあり、やがては、キャンパスの奇妙な部分は描きなおさざるを得ないであろう。「旧倉敷から大倉敷市へ、水島工業地域を含む移住人達も数多い。しかしすでにその二世は倉敷で生まれ倉敷で巣立っており、やがて帰ってくるにちがいない。そのとき、元倉敷をみてほしい。そこに故郷があることを喜んでもらえるものにしてあきたい」と。大原の構図を、市民意識の中で描き彩色しつつける浦辺鎮太郎、それは街あるかぎり描き手をかえて終りなく描きつけられるはずである。



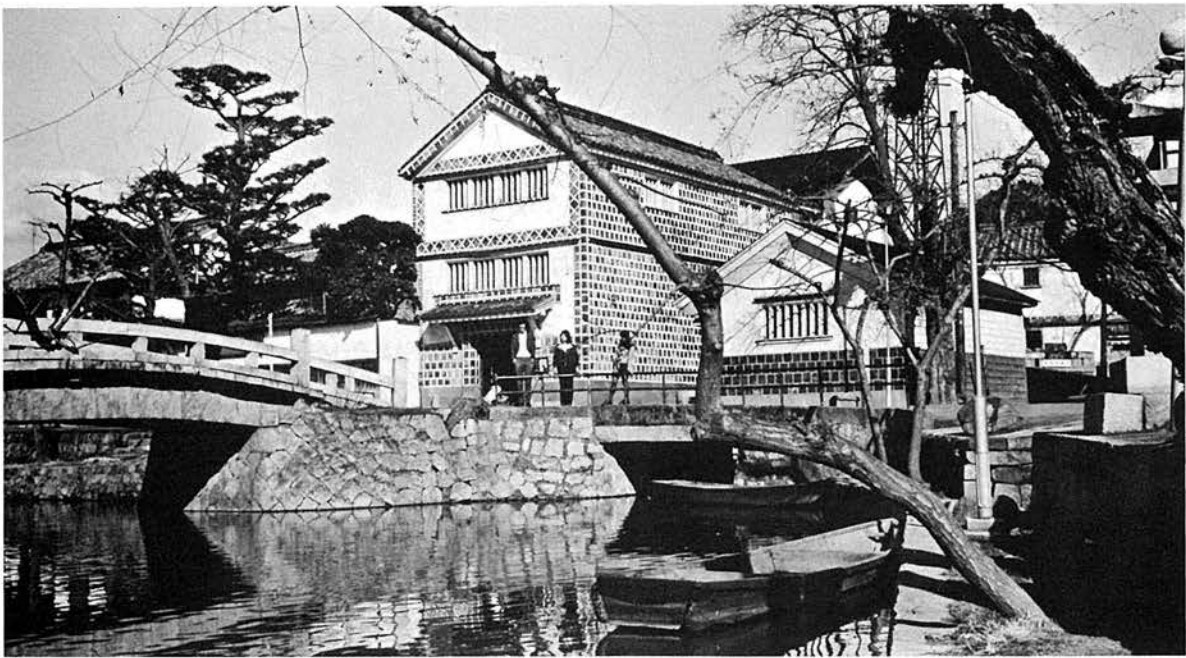
81 アイビススクエアから市民会館

写真：小川泰祐



82 市民会館と倉敷中央病院

写真：小川泰祐



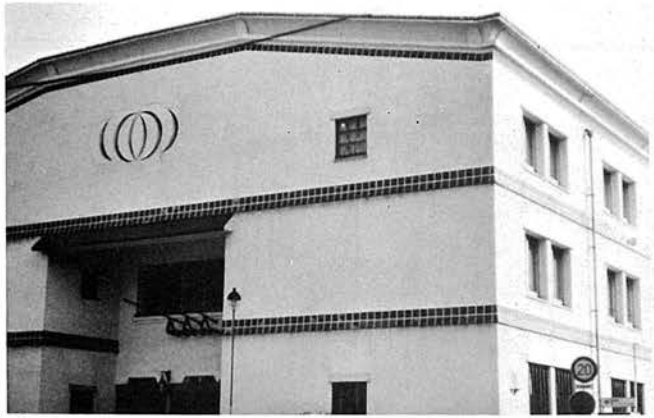
83



84



87



85



88



86

- 83 考古館
- 84 倉敷国際ホテル
- 85 倉敷文化センター
- 86 倉敷アイビスクエア
- 87 旅館くらしき
- 88 珈琲館

写真：SDM